

頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム 2011 年度派遣報告書

派遣期間 2011 年 12 月 29 日—2012 年 3 月 27 日

派遣先 フランス国立東洋言語文化研究所（フランス）・マックスプランク進化人類学研究所（ドイツ）

京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科

東南アジア地域研究専攻

日本学術振興会特別研究員(PD)

西本 希呼

## 1. 研究テーマ

報告者は、大学院博士課程在籍時から継続して、マダガスカル語の諸方言を中心としたオーストロネシア諸語の言語研究に携わっている。2011 年度から、新たに、ポリネシア地域へと視野を向け、調査・研究対象を広げる運びとなった。

今回の派遣前に行った 6 ヶ月間の現地調査（2011 年度派遣報告書 6 月-12 月仏領ポリネシア・チリ領イースター島を参照）によって得られた新たなデータの分析や、ポリネシアという新しい研究対象の理解を助けるため、また、博士課程からのマダガスカル語研究をより深化するために、2011 年 12 月末から 2012 年 3 月末までの約 3 ヶ月間、フランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)に客員研究員として滞在し、パリを拠点に、パリ第 4 大学、パリ第 10 大学、フランス国立科学研究センター(CNRS)、ライプツィヒ（ドイツ）のマックスプランク進化人類学研究所(Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology)を訪問し、研究会への参加、セミナーでの発表、専門家との議論等の学術交流を行った。

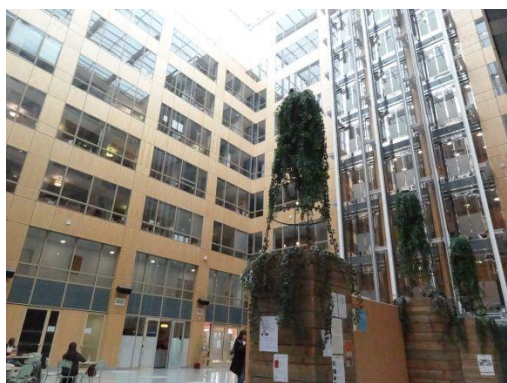
## 2. 派遣の内容

2011 年 12 月末から 3 月末までの約 3 ヶ月間、フランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)に客員研究員として滞在し、主に、大学間共同利用言語・文化図書館(Bibliothèque universitaire des langues et civilisations:BULAC)で文献収集および論文執筆にあたった。パリを拠点に、パリ第 4 大学、パリ第 10 大学、CNRS(フランス国立科学研究センター)の研究会へ参加、2 月中旬は、ドイツのライプツィヒにあるマックスプランク進化人類学研究所(Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)へ研修に赴いた。3 月は、アメリカ合衆国のニューオーリンズで開催された国際アフリカ言語学会および、パリ第 4 大学の類型論セミナーで成果発表を行った。以下、順を追って報告する。

## 2.1 フランス

フランスでは、博士課程在籍中の 2009 年度に、マダガスカル語研究の助言を得たフランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)のインド洋及びオーストロネシア研究センター(Centre de recherche sur l'Océan indien occidental et le monde austronésien:CROIMA)に3ヶ月間客員研究員として滞在し、主に同建物内にある大学間共同利用言語・文化図書館(BULAC)で文献閲覧や研究に従事した。1月4日は、パリ第10大学で毎月1回開催される、マダガスカル、コモロをはじめとするインド洋地域研究者が集まるインド洋地域研究会(Atelier Ocean Indien)に参加した。1月14日は、ソルボンヌ大学で行われた、マダガスカルの西海岸に浮かぶフランス領マヨット島に関する博士論文の公聴会を聴講し、フランスでの学位論文公聴会がどのようなものか知る良い機会となった。3月9日、10日は、パリ第7大学で開催された、国際日本語学会での学会発表を聴講し、日本語学を主とする世界各地の言語学者と交流した。3月12日は、フランス国立科学研究センターの言語・口頭伝承文化研究所(Langues et civilisations à tradition orale: LACITO)で開催された LACITO の博士課程およびポスドク研究員の研究発表会 (Journée des doctorants et post-docs du LACITO)に参加し、オーストロネシア諸語研究に従事する同世代の若手研究者の研究内容のみならず、彼らの志気や、研究姿勢から刺激を得た。2月からは毎週木曜日に高等研究学習実習院(Ecole pratique des hautes études :EPHE)で行われるパリ第4大学の類型論のセミナーに参加し、3月22日に研究発表を行い、博士課程から現在に至る報告者の研究課題や博士論文で残る疑問点について、参加者と議論する場を2時間も得て有意義な経験となった。

Ecole pratique des hautes études (EPHE)



3月22日のセミナー発表



## 2.2 ドイツ

2月9日から2月14日まで、ドイツのライプツィヒにあるマックスプランク進化人類学研究所(Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)の言語学科を訪問し、研修

を行った。Lawrence A. Reid ハワイ大学名誉教授や、菊澤律子准教授の研究会発表を聴講し、滞在期間は研究所の先生から研究指導を仰いだ。

マックスプランク進化人類学研究所, ライプツィヒ



### 2.3 アメリカ

3月15日-17日、ニューオーリンズの Tulane 大学で開催された国際アフリカ言語学会で、マダガスカル語 Tandroy 方言の動詞形態論に関する学会発表を行った。

アフリカ言語学会での発表、アメリカ合衆国、

Tulane 大学にて

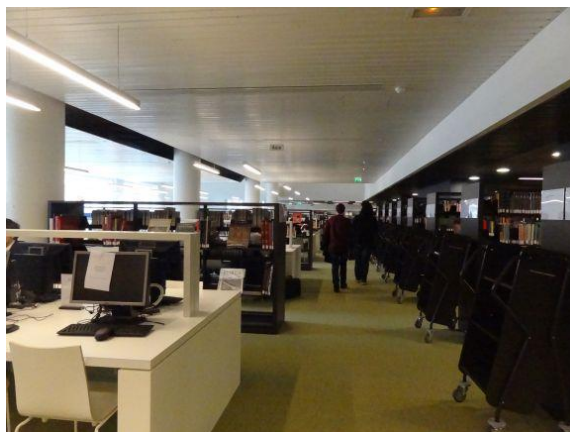


### 3. 派遣中に印象に残った経験

フランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)及び大学間共同利用言語・文化図書館(BULAC)は2011年12月に改築され、これまで別々の場所に位置していた学科や専攻、図書館が同じ場所に集合した7階建ての新しく大きな建物としてフランス国立国会図書館の近くに移転した。報告者が博士課程在籍中、2009年11月から2010年2月の4ヶ月研修に同研究所へ滞在した時とは、随分研究環境が変わり、快適になった。今では、

フランス国立科学研究センター(CNRS)やパリの他大学の学生もフランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)の地下と1階にある図書館で、日々研究や勉強にいそしんでいる。大学間共同利用言語・文化図書館(BULAC)は人文科学を中心とする言語学、文学、文献学関連の図書や学術雑誌、世界の諸言語の辞書や文学作品を所蔵し、月曜から土曜日まで22時まで自由に閲覧し、学習することができる。また、日本語学科があるため、日本語学のみならず、歴史、社会学、人文地理学、民族学、日本の自然や風土など、幅広い分野を取り扱った和書コーナーや和文雑誌が大変充実していたことも印象的である。学習スペースには、卓上ランプと、電源コンセントがあり、ノートパソコンを持参して作業することができ、パリ市内の他の学術機関と比べても、非常に快適な学術環境が整えられている。

移転し新築されたフランス国立東洋言語 大学間共同利用言語・文化図書館(BULAC)  
文化研究所(INALCO)



#### 4. 目的の達成度・反省点

2011年度は、学位取得後、大変慌ただしく、6月から6ヶ月間、新しい調査地（仏領ポリネシア・オーストラル諸島ルルツ島、チリ領ラパヌイ）へ赴き、その後すぐに、フランスの研究所へ3ヶ月間移動することとなった。新しい調査対象言語に関する先行文献や資料のレビューを行う間もなく、次々に日程が入り、一つの研究発表や、取り組んでいる課題に十分な時間を費やし、準備することができなかった。特に、パリ第4大学やアメリカの Tulane 大学での発表への準備不足や至らなかった点は多いに反省すべき点である。

一方、マダガスカル語研究から、仏領ポリネシア、チリ領ラパヌイ（イースター島）での調査、日本帰国後すぐにフランス国立東洋言語文化研究所での在外研究は、大胆な移動ではあったが、2011年度での派遣で得られた新たな資料、新たな調査地で築いた人脈や調査基盤は、学位取得後の視野を広げ、自由に長期的な視点から今後研究を進め

る上での、貴重な経験になった。12 月末からの、フランス、ドイツ、アメリカでは、報告者が博士課程からこれまで各地で行ってきた学会発表で会った人との偶然の再会や、同世代のオーストロネシア言語研究に従事する若手研究員との出会いがあった。パリの各学術機関では、オセアニア諸語研究を専門とする学者と交流することができた。短期間の滞在で、日々慌ただしく駆け足気味ではあったが、これらの経験は、今後の研究活動にとって有意義である。

## 5. 今後の課題

博士課程までの研究対象地域であるマダガスカル、学会発表や短期調査で訪問したマレーシアやインドネシアに加え、今年度の派遣で可能となった、仏領ポリネシアとラパヌイ（イースター島）でのフィールドワークを通じて、オーストロネシア語圏の西の果てから東の果てまで一度足を運びたいという夢がかなった。さらに、2011 年 12 月末から 2012 年 3 月末までの 3 ヶ月間のフランス滞在期間中は、マダガスカル語研究者、オセアニア諸語研究者と学術交流を行うことができた。

当面の間は、日本に腰を据え、これまで得られた資料や、助言やコメントを反映しながら、報告者の博士論文(A Descriptive Study of the Tandroy Dialect of Malagasy)を改良して行く事、新しい研究対象領域となったポリネシア諸語については、基礎文献のレビューや集めたデータの分析を開始することに十分な時間を充てたいと考える。

尚、2011 年度の本派遣制度で得られた成果の一部は、2012 年 7 月インドネシアで開催される国際オーストロネシア言語学会で発表する予定となっている。

## 謝辞

フランス滞在中は、突然の訪問にもかかわらず、好意的にセミナー参加を受け入れて下さったパリ第 4 大学の Lemaréchal 教授、フランス国立科学研究センター(CNRS)、言語・口頭伝承文化研究所(LACITO)の Moyse-Faurie 教授、Brill 教授に感謝申し上げます。また、類型論セミナーの参加者や、言語・口頭伝承文化研究所(LACITO)のオーストロネシア諸語研究に従事する修士課程、博士課程の学生は、私の発表に耳を傾けて下さり、貴重な助言を得ることができました。博士課程在籍中から今回の派遣まで、受け入れ研究者となって下さったフランス国立東洋言語文化研究所(INALCO)の Rajaonarimanana 教授、および、2010 年から継続的に研究会案内を回して下さるパリ第 10 大学の Blanchy 教授のご厚意にお礼申し上げます。

このたびのヨーロッパでの在外研究は、3 ヶ月間の間に、パリを拠点にアメリカ合衆国やドイツの学術機関へ移動を行い、日本学術振興会の財政援助なしでは、到底かないませんでした。寛大な財政的援助および、慌ただしい日程調整や、資金の管理に便宜を図って下さった京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の事務方に対して、ここに感謝の意を表します。